

回想法を用いた博物館の新たな機能に関する考察

—シニア世代と若者世代の文化伝播を円滑にするための

新たなシステムの構築にむけて—

Investigation about the new function of the museum
using the reminiscence method.

—The system design for cultural tradition between senior generation and young generation. —

鳴瀬 麻子

大妻女子大学博物館

Asako Naruse

Otsuma Women's University Museum

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：博物館，回想法，コミュニケーション，文化伝播，学芸員

Key words : Museum, Reminiscence , Communication, Cultural Tradition, Curator

抄録

本報告は、平成24年度大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究「昭和初期の博物館資料を用いた介護予防のための回想法の試み」として、回想法の博物館における取り組みの実態調査を行い、また研修会にも参加し、その理論を学ぶ中で考察した回想法の応用について報告するものであり、現時点では試論の段階であることを付記致します。

近年、回想法は高齢者の介護・認知症予防の一環として医療福祉施設で取入れられてきており、博物館においても昭和期に用いられてきた日常生活用品を用いて、この回想法を取入れるところが増えてきている。本研究は、医療福祉施設と博物館における回想法の取り組みについて調査を行い、またそれによって得られる情報から更なる回想法の応用の可能性を探ることを目的とした。

その結果、回想法を応用することによって、シニア世代と若者世代のコミュニケーションを高めることにより、両世代の文化伝播をより円滑に図れること、またさらに、失われつつある諸民族の文化を伝える方法論についても応用することが期待できると考えられることから、博物館が新たな機能を発揮できる可能性が示唆された。

1. 研究の背景

近年、回想法は高齢者の介護・認知症予防の一環として医療福祉施設で取入れられてきており、博物館においてもこうした活動を試みる館が増えつつある。

本研究は、介護福祉施設と博物館における回想法の取り組みについて調査を行い、またそれによって得られる情報から更なる回想法の応用の可能性を探ることを目的とした。これは、新たな博物館

の機能を創造する可能性を秘めていると考えられる。

回想法は、1960年代にアメリカの精神科医ロバート・バトラーが提唱した。人は高齢になると、過去の経験や出来事を思い出すことが多くなる。このような状況は一般的に「現実逃避」「過去回避」と否定的に受け取られがちだが、バトラーは「こうした行為は、人生の発達段階の最終課題である死に直面した時期に無意識的に起きる、誰にでも

見られる普通の行為である」と位置づけ、過去の楽しい記憶を甦らせることにより精神面の改善あるいは認知症などの進行を遅らせることが出来るとして回想法による治療を提唱した。

この事は、近年の脳内活動研究からも確認がなされ、海馬にある過去の楽しい記憶を回想することにより、報酬系にドーパミンが放出され幸福感が生まれることが示されている。



昭和日常博物館内

2. 研修および調査研究実施報告

平成24年8月4日、著者は東京都港区「おいしさ科学館」で行われたNPO シルバー総合研究所主催「ケアワーカーのための回想法初級研修」に参加し、回想法についての基礎的講義及びワークショップ等で回想法の理論面について講義を受けた。ここでの参加メンバーは医療福祉関係の方々がほとんどであった。この研修に参加することで、医療福祉施設の職員との交流を持つことが出来たが、その施設職員との交流の中で、回想法を取入れたいという職員の意識と現場での意識とは格差があり、また多忙な職員の限られた勤務時間内では職員主導での回想法の実践はかなり厳しい現状にあることがわかった。

そこで、実際に博物館では、どのように回想法を活用しているのか調査を行うこととした。

平成24年6月19日、東京都北区飛鳥山博物館での回想法の取組みを、学芸員から直接聞き取る方法で調査を行った。ここでの取組みは、館内に昭和期の家屋や納屋など実物を展示し、回想法への館内活用を行っている。また、周辺にある介護施設等で、博物館が所蔵する資料を用いての出張回想法も行ってた。

次いで10月6日～10月7日、愛知県北名古屋市歴史民俗資料館（昭和日常博物館）において調査を行った。北名古屋市歴史民俗資料館は、回想法のモデル博物館として有名である。ここでは、平成に入り失われていく昭和の日常で使われていた身近なものを収集・展示したことが、回想法という新たな取組みの礎となったという経緯を館長から伺うことができた。ここではまた、市の直接文化財である旧家を利用し回想法センターを作り、多くの高齢者に向けて回想法を行い、膨大な昭和の日常生活用品の一部を回想法キットとして、貸出しを行っていた。

また10月24日～27日、秋田市において「第60回全国博物館大会」が行われ、その分科会として催された「新しい博物館の取組み」では、岩手県遠野市博物館での取組みの一つとして、回想法を地域と連携して行っていることが発表された。日本の各地の博物館でこのように回想法についての様々な取組みを行っている実態が理解できた。

著者自身の具体的活動として、11月20日、医療福祉等で回想法を試行することが可能かどうかの調査を行った。具体的には、都内にある回想法に関心のあるグループホームに出向き、認知症度の軽い入居者との関わりの中で、子供の頃の思い出など振返って頂いた。しかし、初対面であること、約1時間程度の面接であったが、その後、入居者の方が数日間子供の頃に使っていた道具を繰り返し繰り返し呟いていた、とあとで聞かされ、軽度の認知症の方であっても、やはり普段から交流のある職員が回想法を用いることが、最も安心して行える手段なのではないかと考えられた。

3. 考察・今後の展望

これまで調査研究を行った中で、回想法は介護・認知症予防に留まらず、高齢者が過ごしてきた日常を聞き取りすることによる民俗学的調査、また地域の子供達への文化伝承、すなわち世代間交流という、相乗効果が出現することが分かった。

以上、本年度の調査結果を踏まえたうえで、新たな回想法の応用として、以下の事が指摘できると考えた。

① 学芸員によるシニア世代からの資料・情報収集

平成に入り、携帯電話を始めとして各種の家電製品はさらに進化し、それまで使用していた日常生活用品の形態変化や使用法の変化により、昭和期の日常生活が姿を消し、高齢者にとっては使用方法すら不明になってきている現状である。こうした現状を考えた時、シニア世代からの日常生活

用品に関する情報を収集しておくことの重要性が、改めて指摘できると言える。すなわち具体的な方法論として、学芸員が回想法の手法を用い、過去の楽しい思い出を振り返りつつ昭和期の生活資料の使い方に関する情報収集を行う事が可能であると考えられる。

② シニア世代から若者世代への生活文化伝播

現在、介護・認知症予防として活用されている回想法は一方的である。しかし、高齢者が回想した昭和期の出来事や日常生活用品の使用法を若者世代に伝えてゆくということは、若者世代への文化伝播の手法としても、この回想法が使えるということを意味していると考えられる。

また、年々増え続ける高齢者の孤立や孤独死は、高齢者自身が存在価値を見失っていることによるものが大きいと考えられる。そのためシニア世代の生きてきた文化を若者に伝える事によって、彼らの存在価値の再認識へと繋がると考えられる。

③ 若者世代からシニア世代への文化伝播

前記したように、家電製品の進化により、シニア世代はそれに対応しきれなくなっている。例えば、電話である。ダイヤル式の黒電話がやると、昭和の中ごろに普及し、一家に一台となり、家族全員でそれを共有していた時代から、プッシュ式へと代わり、携帯電話は一人一台の時代となった。さらに現在は、タッチ式の 아이폰へと大きく変化している。ダイヤル式電話から比べると情報量の多すぎる 아이폰の扱いは、シニア世代には難しいものである。そこで、若者世代の文化をシニア世代に伝えることも重要な課題であると考えられる。

回想法を行う場面は、この若者世代からシニア世代への文化伝播をも可能にするものであると考えられる。

④ 相互方向で行う両世代の文化伝播

同じ目的で使用する日常生活用品は、シニア世代・若者世代の両世代では、形態もその使用方法にも大きな変化がある。そこで、両世代の使ってきたあるいは使っている日常生活用品についてお互いの認識を持つ事が重要である。若者世代にとっては、その変化が今後さらに変化するであろう可能性を目にすることが出来、シニア世代にとっ

ては、今現在使われている生活用品について知ることができ、さらに若者世代からの最新情報を得ることが可能である。

⑤ 地方あるいは小規模博物館で活用するための回想法

日本の高齢者人口は、すでに25%を超え4人に1人が65歳以上の高齢者となった。過疎化する地方都市では、更に高齢化率は高いのが現状である。そこで高齢者への一つの支援の方法として、地方にある郷土館あるいは資料館など小規模な博物館において回想法を取入れることが上記の機能を活かす一つの方法、あるいは場面であると考えられる。

⑥ 失われつつある文化伝播

情報ツールの発達により、少数民族の生活も西洋化するという文化淘汰がおき、それまでの民族特有の生活文化が失われつつある。そのために、少数民族、特にシニア世代から若者世代への情報伝達は必要のものとなる。この場面においても回想法は有効な手法として機能すると考えられる。

これらの調査から、今後もさらに独自の方法による回想法の取り入れ方をしている博物館を調査し、また過疎化の進む地方都市などにおける小規模な博物館での回想法の活用が可能となる方法を構築することが必要であると考えられた。

すなわち、これら博物館としての新たな機能を実現するためのシステムを構築する必要があると考えられた。

最後に

本年度、イギリスのレスター大学の教授であるビビアン・ゴールディング氏より博物館学芸員課程における回想法のワークショップについてのご教授を頂いた。これらの情報もさらに消化しつつ、今後は大妻女子大学博物館の博物館学芸員課程においても回想法を取入れ、世代を越えて人と人とのコミュニケーションを図ることの出来る学生を育てていくことも大きな目標としているところである。

Abstract

Reminiscence has become to be used for preventing the dementias in medical or welfare facilities, recently. Museums also began to use the reminiscence for the same purpose with the museum materials especially in Showa period. The purpose of this study was to research the activities in medical or welfare facilities to search the new application of reminiscence as the new function of the museums.

It was concluded that the application of reminiscence in museums was to be expected to promote the interrelationships between senior and younger generations; the cultural tradition, and which will be expected to be used for the tradition of the culture of the disappearing tribes in the world.

(受付日：2013年7月8日，受理日：2013年7月19日)

鳴瀬 麻子（なるせ あさこ）

現職：大妻女子大学博物館 学芸員・助手

大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科卒業

専門は博物館学・和裁，現在は博物館でどのように回想法を取入れ活用してゆくかについての研究を行なっている。